

インドネシアの歴史建築

Historic Architecture of Indonesia

野 口 英 雄
NOGUCHI Hideo*

目的：

本論によって、インドネシアの通称「ヒンドゥ・ジャワ時代」の歴史的建築の中で、特に選定された宗教建築について、時代区分と建築意匠の傾向の一面に限定して記述する。

本来、インドネシアに限定しても、その豊かな建築文化を分析し記述するのは、大変な労力を必要とする。その主な理由は、多様な文化をもつ広大な国土と、少なくとも2000年以上をカバーする必要から発している。その上にこのような文化研究には、現在の国境を超えた検討も要求される。他方建築文化の記述は、意匠ばかりではなく、機能や構造など多面にわたって検討する必要がある。それにも係わらず残念ながら、研究の歴史的な制約から、そのような研究の成果は世界的にみて未だ極めて不十分である。言い換えると、そのような研究の必要性は高い。今後の2005年を目処に、国際協力による研究を目標にしている。

以上のような多様な文化の歴史地理空間の広がり、長い歴史の時間的スパンに立脚して、この国の多様な文化の建築文化史の面を、全インドネシアにわたり通観し比較検証するのは大層興味深いけれども、その多くは将来の研究に期待しなければならないことは、上述の通りである。インドネシアにおける土着建築やまた西洋式建築の部分的な研究も最近その緒についたばかりである。これらの制約から本稿では、インドネシアの代表的な歴史建築と見なされる「ヒンドゥ・ジャワ時代」、すなわち西暦1世紀頃から1530年頃までの約1500年間の建築に限って述べる。

建築の記述：

建築の三要素は「用」「強」「美」と云われる。建築を記述する時に、住宅、宮殿、寺院や神殿などと、まず分類に頼るのは、建築が機能（機能は「用」によって代表される）を満たすことを期待される構築物だからである。しかし住宅、宮殿、寺院や神殿を比べるとき、一般にその規模は大変違っている。その違いは、それを建て使う人が違うからである。その上に、使われ方がまったく違う。そして抽象性や象徴の度合いがまったく違う。例えば寺院や神殿は、目に見えない神や宇宙を象徴したり、ひとびとの非日常的な祈りの場を提供したりする。宮殿は政治や権力を象徴し、また文化を政治的かつ造形として提示する。それに比べ、住宅は生活の機能充足を第一とする。住宅に表現される宇宙観や世界観は勿論存在する。しかしそれは極めて慎ましく、住宅の群で、床の間や屋根飾りや間取りに観察され実感されるのが普通である。このように、建築をその分類に頼りながら、機

* Professor, Tsuru University

Visiting Researcher, Tokyo National Research Institute for Cultural Property

能と意匠と象徴（それが「美」の領域に属する要素である）とを記述することができる。その折にも、柱、壁、屋根などの主要構造部の組み立て方が、密接に関連していることは云うまでも無い。建築彫刻や飾りなど装飾すなはち「美」の要素もそれに加わる。

次に、構造材料とそれを組み立てる構造方式（これが「強」の要素である）とが検討される。世界のそして人類史上にみる建築の全ては、石と土と、そして木など有機材で出来ている。その中には、土を成形し焼成して作られるレンガも含まれる。石灰岩や貝を焼くことによってできるセメントをモルタルとして使ったのも古い。鉄やブロンズや鉛などの多少の金属も、西暦1000年前後から積極的に使われている。木材を束ねて組み立てるのはもっと古くからである。しかしポルトランド・セメントと鋼とガラスを、建築の主要な材料として生産し構築したのは、西洋における産業革命末期の19世紀後半からである。一般的に言えば、その土地で簡単に手に入る材料が、建築材料となる。建築物は、荷重を垂直に支える壁や柱と、それを水平に結びその下に空間を作る梁や屋根からなる。例えば、日本と熱帯アジアでは豊富な木材が、建築の主要構造材として用いられる。そうすると、古代インドの建築書「マーナサーラ・シルパシャーストラ」（西暦5世紀ごろ）や「マヤマタ・アルタシャーストラ」の記述に見られるように、木や石は自然に生命をもった物として認識され、それ故にその生命を生かしたまま構造材として用いることになる。例えば、立ち木そのものの上方や東の面を、建物の中でも上方や東面に向けて置かれ、その生命体としての命を持続することになる。建築物と大地との接点は、土中に隠れる地業をなすことにより、地上に見える上部構造を安全に支えられる。この地業には、ヒンドゥ文化圏では曼荼羅が描かれ、宝石や穀物など意味のある、宇宙の構成物を置き、祈りがささげられる。従って、歴史建築の考古学的調査や保存に当たっては、この地業に最深の注意を払う必要がある。このように建築を構成する材料に生命を認識したり、宇宙を認知したりするのは、上記の象徴の領域でもある。総じて、建築することは伝統的には、目の前に存在する宇宙の秩序を発見し、その秩序の中に新しい建築という生命体を挿入し、よりよい秩序をつくることであると考えられてきた。その建築が生命を失う時にも、もっと大きな秩序に回帰すると考えられた。

広大で豊かな文化を持つインドネシア：

インドネシアは「赤道にかかる真珠のネックレス」と呼ばれる。その美しい姿に擬える13,000の大小の島々が、東西5,200キロメートルにわたって点在し、190万平方キロメートルの広大な国土を成す。1993年の人口は1億9,200万人である。マレーポリネシア系に属する250にも上る文化集団と種族が、スマトラ、カリマンタン（ボルネオ）、ジャワ、バリ、スンバワ、フロレス、チモール、スラウェシ（セレベス）、ハルマヘラなどモルッカ諸島、イリヤンジャヤ（ニューギニア）などの群島に生活している。1891年に中部ジャワのサンギランと、続いて北東スマトラで、約50万年前の原人ピテカントロプスが発見された。紀元前2000年頃から、文化のマレー化が急速に進んだが、原マレー系のネグリート（セレベス）、メラネシアン（パプア）、ダヤック（ボルネオ）、バタックとガジョ（スマトラ）などがそれぞれ固有の文化を形成し、共存している。古来、森林、鉱物、海産など天然資源は極めて豊かであり、熱帯稲作農業と交易を主にする海洋文化が特徴である。ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベスなどの海岸地帯では、王の統治支配と文化の面で

のインド化が西暦紀元頃から進んだ。続いて13世紀の始めからイスラム文化の影響を受けた。これら受容し変容したインドとイスラムの二つの外来文化は、インドネシア固有の文化と並んで、この国の基層文化を形成して現在に至る。香料貿易を目的にする、ポルトガル人の西ジャワへの定着も16世紀始めから。それに続くオランダ人の定着と植民地支配は、16世紀の終わりから1940年まで約350年間続いた。その間1811年から1816年までは、オランダとともにインドネシアもイギリスの支配下にあった。1877年からオランダ本国から独立した自主統治が開始され、インドネシア文化人によるタマソシスワなどの、自己文化教育運動も盛んになった。日本軍も1942年から1945年まで統治した。1945年8月17日に、スカルノはインドネシアの独立宣言を発した。これを受けて1949年にアメリカとオランダの主導によるハーグ会議で、新国家インドネシアの建国が承認された。現在人口の88%はイスラム教徒、9%がキリスト教徒、残る3%が仏教・ヒンドウ教や儒教や原始宗教をもつ人々である。350万人の中国系は人口の2%を占める。

自然環境と天然資源の豊かさがインドネシアの特徴の一つであるが、また文化の多様性と、比較的他の文化に対する寛容性はもう一つの特徴である。人口の60%が、国土面積の7%しかないジャワに集中するのも、19世紀以来の開発の結果であるが、この国の人口分布の格差は、過去二千年紀にわたる特徴であろうと考えられる。

ヒンドウ・ジャワ時代の時代区分と歴史地理：

ヒンドウ・ジャワ時代の時代区分は、若干の年代記と碑文に基づいている。1世紀頃から6世紀頃までの西ジャワ期、7世紀から10世紀半ばまでの中部ジャワ期、928年頃から1530年頃までの東部ジャワ期の三期である。しかし前の二期については決定的な歴史的記録の不足から暫定的である。またこれら三期の時代名に付帯する地域の名は、碑文や遺構遺物の集中して存在することから想定される、当時の統治と文化の中心地区を意味し、ジャワの他の地区やスマトラ、スラウェシ、カリマンタンなどの外島にも、同時代の遺構遺物は少なからず確認されている。

西ジャワ期：

その実態が殆ど判明していない西ジャワ期ではあるが、タルマネガラ王国の存在を示す二つの碑文には、5世紀始めに東カリマンタンのムナヴァルマン王と、5世紀半ばに西ジャワのプルナヴァルマン王の名を記す。その他若干のヴィシュヌ神像やチャンデイの痕跡がある。2世紀ギリシャのクロード・ブトレマイオスの地理書（Mullerによるバリ1883年版Geographie）には、Yawadiou（大麦の島）が見え、同意語のサンスクリットJawadwipaに対応し、ジャワ、スマトラ、カリマンタンが考えられている。また中国の史書には南海ジャワ国が、邪婆堤、葉調、大麦と記され、王達の名には跋摩（ワルマン）が付いている。例えば後漢書南蛮伝には、132年にジャワ（葉調）の王が朝貢し金印を授かったと記す。413年に中国晋朝の僧侶法顕がインドからの帰途ジャワ国（邪婆堤）に寄り、この国ではバラモン教は盛んだが仏教は云うに足らずと記す。南宋には430年から464年までの間に、ジャワの王からの朝貢が10回あったと記す。ジャワの碑文にサカ紀元が記されジャワ紀元とも呼ばれ、その元年は西暦78年である。アージサカが西インドからジャワに渡り建国し、紀元を創設したとの伝説に対応している。

中部ジャワ期：

7世紀頃から10世紀半ば頃までの中部ジャワ期には、主に碑文と遺構から、シュリヴィジャヤ朝、ヒンドゥ教のマタラム朝、大乘仏教のシャイレンドラ朝の三つの王朝が並存していたと考えられる。シュリヴィジャヤ朝の王都はスマトラのパレンバンに、他の二王朝はそれぞれ、中部ジャワのケドゥ盆地とプランバナンの平野にあったと推定される。中部ジャワと東部ジャワには、3,000メートル以上の幾つもの火山が円錐形の美しい姿を見せ、その山間と裾野には、主に火山岩の切石を空積みした遺跡が多く見られる。中部ジャワ期の文化の中心は、ブラウ山、スンドロ山、スンブン山、ウンガラン山など六つの火山からなる山岳地帯とディエン高原、そこから南インド洋に流れるプロゴ川とエロ川の作るケドゥ盆地、そしてジョクジャカルタを貫流するオパック川の中流平野のプランバナンの三地区である。ここには今でも古代の歴史的景観を実感できる。

東部ジャワ期：

928年頃から1530年頃までの東部ジャワ期の三つの王都は、十にも上る火山の間を大きく「の」の字を描くブランタス川の中流にクデイリ朝（928—1222年頃）、その上流にシンガサリ朝（1222—1292年頃）が現在の地名に残り、最後のモジョパイ朝（1293—1530年頃）の王都は更に下流でスラバヤ川との合流点に近く、今のトロウランの郊外である。クデイリ朝のダルマヴァムサ王の1007年頃、マハーバーラタが古代ジャワ語に翻訳され、モジョパイ朝第四代ラージャサナガラ王の1365年に、年代記「ナーガラクルターガマ」が編纂され、諸王の業績や建築などの様子が判明している。1292年にシンガサリ朝第五代クルタナガラ王を暗殺した藩主ジャヤカトワンは、その翌年中国の元軍に囚われシンガサリ朝は終わる。続いてクルタナガラ王の義子ヴィジャヤが、モジョパイ朝を再興した。東隣のバリ島も統治され、当時の建築や文化も今日に根付いている。

これら三期1,500年間にわたるヒンドゥ・ジャワ時代を通じて、土着の山岳信仰の影響で、王都は内陸部に立地した。インドに似て、さらに国の要所に配置された封建領主達によって、交易と農業経済を取り仕切ったのであろう事が、碑文などから推定されている。そして13世紀頃からアラブやインドの商人を経てイスラム教の影響を受けていたジャワやスマトラは、15—16世紀になると更に盛んな香料貿易の影響と、王朝内の婚姻と統治の衰退により、ヒンドゥ・ジャワ時代は1530年頃に終わる。その後は今日までバリ島にのみ豊かなヒンドゥ文化が生き延びることになった。

ヒンドゥ・ジャワ時代の建築：

19—20世紀に西洋人によって次々と再発見され、今日まで研究されているヒンドゥ・ジャワ時代の建築は、主にヒンドゥ教と仏教の寺院と僧院である。それに東ジャワ期の王墓廟や王都の遺跡が加わる。それらはインドネシア語で「チャンディ」と呼ばれている。チャンディは一般に遺跡の意味でもあるので注意が必要である。ヒンドゥ教と仏教の寺院はそれぞれ区別され、離れて立地している。と同時にそれぞれが極めて接近しているのは、僅かに違う建設時の違う寺院が混在しているためである。その上に相互を宗教的に区別しないジャワ特異の宗教観の故であると理解されている。東部ジャワ期には、これら二つの宗教の統合したアゴモ仏陀へと変質していった。

これらの歴史建築の殆どが、火山岩の規格化された切石のブロックを空積みした、極めて簡単な構造である。焼成レンガの構造も少数であるが並存している。中部ジャワ期のプランパナンのラトウボコや、東部ジャワ期のマジャパイト朝の王宮の跡には、宮殿など多くの建築と施設の遺構があり、柱間4から6メートルの木造の建物の跡も少なくない。ポロブドゥールなどの浮き彫りにも、木造の建物を見ることも少なくない。またヒンドゥ・ジャワ時代を通じて、一般の住宅建築や橋なども、木や竹の構造であったであろう。しかしその実態はよく分からず、今後の精密な考古学的な調査研究によってしか判明できないであろう。東部ジャワ期には焼成レンガが構造材と化粧材として多用された。よって本稿では、代表的な石造とレンガ造の宗教建築が主に紹介される。ヒンドゥ・ジャワ時代の宗教建築は、高さや平面の壮大さよりは、建物や浮き彫りのデザインと仕事の精巧さをもって、精神性を表現している。高さあるいは広さを誇る建物では、チャンディ・ロロジョングランのシヴァ堂が47メートルの高さ、仏教のチャンディ・セウの寺苑の一边が250メートルで、それぞれ例外的である。

屋根が宗教性を表現する装飾を兼ね、迫り出しの石積みの力学的な限界から、神像を安置する内部空間にしても、精々6メートル四方を上回ることがない。これより広い建築空間の殆どは、柱と梁による木造であった。王宮などの木造建築は、18世紀に再興された中部ジャワのジョクジャカルタやソロのクラトン宮殿建築にその名残を認めることができる。

ヒンドゥ・ジャワでは宇宙観の象徴的な表現が好まれた。ヒンドゥ教では単一のものを多様に表現し、仏教では多様なものを単一に表現する。この両者は相補関係にある。事象や想念を全体と部分の整然とした構造として捉える。今でも広義のジャワ人の精神性にこの傾向を見ることができる。例えば、ヒンドゥ教にみる宇宙は山々に囲まれた方形で、その中心にマハメル山が無限の地中から天空へ聳える。この宇宙は神界スヴァールロカ、清界ブーヴァールロカ、人界ブールロカの三界からなっている。また大乘仏教の三界は、無色界アルパダトゥ、色界ルパダトゥ、欲界カマダトゥからなる。真理そのものであり人間の理想像である仏陀は三つの姿で表現される。化身ニルマーナカーヤ、応身サムボガカーヤ、法身ダルマカーヤである。それぞれのチャンディの寺苑や建築をもって、このような三界を象徴し表現していると考えられている。寺苑は内苑ジェロアン、中苑ジャバテンガ、外苑ジャバからなる。建築は主堂、回廊、基壇の三要素からなり、その立面は下から基壇、堂身、飾り屋根からなる。

中部ジャワ期は、インドとの交流も盛んで、政治、宗教、美術の影響も盛んに受けた。また仏跡チャンディ・ポロブドゥールやシヴァ教チャンディ・ロロ・ジョングランなど人類史上に記念すべき建築を建設するほどの創造性と技術力に富んだ時期でもあった。中部ジャワ期には、南インドのパッラヴァ朝の影響を受け入れて、ヒンドゥ教のマタラム朝（7世紀から10世紀始め）が7世紀後半から、ディエン高原のチャンディ群、ウンガラ山山のチャンディ・ゴドンソンゴ、チャンディ・プリンガプスなどのシヴァ教の寺院を建設した。これらは低く平板な基壇と建築彫刻の単純さから、中部ジャワ期初期の建築だと考えられている。ヒンドゥ教のマタラム朝は、760—780年頃のチャンディ・バノンの建設を経て、9世紀中頃ピカタン王によるロロ・ジョングランの秀作の建設に至る。チャンディ・バノンは仏跡ポロブドゥールの近くに建ち、焼成レンガ造の小型のシヴァ神堂であったが今はその跡は消滅してしまった。しかしその跡から1904年に発見されたヴィシヌ、ブラフ

マン、グル、ガネシャなどの優れた大型の立像がジャカルタ博物館に保存されていることから、この神堂の重要さを想像できる。ヒンドゥ教のマタラム朝よりやや遅れて、大乘仏教のシャイレンドラ朝が、中部ジャワ南部のプランバナナ平野を中心に並存した。ラトゥボコはその王宮の跡だと考えられる。ベンガルのパーラ朝や南インドの影響を想起させ、この王朝は多くの優れた仏教建築を残した。778年頃創建されたチャンディ・カラサン、チャディ・サリ、782年頃のチャンディ・セウ、800年頃創建のチャンディ・ムンドゥ、そして760年頃から850年頃までに建設された仏跡チャンディ・ボロブドゥールなどがその代表作である。856年以前には建設されていたチャンディ・プラオサンの奉献建築群からは多くの碑文が発見され、当時の貴族の領地の整然とした立地関係を想定させる。言い換えると、このような寺院の建設は信仰の証であると同じに、領地関係のような現世の構造関係を建築によって、定着し再確認する営みでもあったと言える。これらの建築は、主に安山岩の切石を空積みした比較的に単純な構造である。しかしそのデザインや彫刻の豊かさと美しさは特筆されることが多い。10世紀始めには大噴火と地震のため、中部ジャワの多くの建築や町が破壊され埋没した。1966年にプランバナナの火山灰層の地下6メートルから、ヒンドゥ教のチャンディ・サンビサリが発見されたことが、その証左となった。その上に統治の緩みなど人為的な要因も加わり、中部ジャワ期は終わり、東部ジャワ期に移行する。

東部ジャワ期は928年頃から1530年頃までの600年間である。クディリ朝、シンガサリ朝、マジャパヒト朝の三つの王都の位置は判明し、今後の更なる考古学的調査を待っている。東部ジャワには中部ジャワ期の建築も少なくない。東部ジャワ期には、王族の墓廟建築が山岳に近く建設されるのが通例となる。ヒンドゥ教や仏教は土着の山岳信仰と融合し、建築の表現は中部ジャワ期にみた創造性よりは、ヒンドゥ・ジャワ固有の芸術表現の確立と形式化へと向かうのが特徴である。東ジャワ期には、フナンやクメールなどインドシナとの交流もあり、それらと共通する五塔形式の建築が出現する。中心の主堂を最高として、それから独立した門楼と残る三面の側楼とを五つのまとまった塔群として表現するものである。安山岩や他の石材に加えて焼成レンガも多用される。建築の基壇は重層となり高く、堂身も尖塔形の屋根も高さを強調する。建築装飾としてのラーマヤナやマハーバータの彫刻は平板で形式化している。

クディリ朝には、977年頃のチャンディ・ジョロトゥンド、1049年に建設されたエルランガ王墓廟のチャンディ・ベラハン、エルランガ王の末弟アナック・ヴングス王の墓廟チャンディ・カウィ等がある。続くシンガサリ朝には、1260年頃建設された第二代アヌージャパテイ王の墓チャンディ・キダル、1280年頃建設の第四代ヴィシヌヴァルダーナのチャンディ・ジャゴ、シンガサリ朝最後のクルタナガラ王の墓廟として1304年頃建設されたチャンディ・ジャヴィとチャンディ・シンゴサリ等が秀作である。東部ジャワ期最後のマジャパヒト朝には王都であったトロウランとその近郊に見るべき建築も多い。1309年頃創建された初代ヴィジャヤ王墓のチャンディ・スンベルジャティは、王の孫アヤムウルクすなわちラージャサナガラ王が1361－1363年頃に再建した。マジャパイト朝の王都の西北部に建っていたヒンドゥ寺のブラウ、南東門のチャンディ・バジャンラトゥなどは1300年頃の建設である。第四代ラージャサナガラ王の時代には大いに領土を拡大し、マラヤ、ボルネオ、フィリピンの南部まで、現在のインドネシア以上であった。それだけ経済的余剰と、政治

の安定と芸術の発展をみたことが窺がえる。1197年から1454年までの碑文を内蔵するチャンディ・パナタランはジャワで最大の寺苑を形成し、東部ジャワ期の代表作である。

結論：

私は、インドネシアが世界文化自然遺産条約を批准する動機を、文化大臣に勧告することで作った。同時にボロブドゥールとプランバナンを世界遺産として推奨した。それはインドネシアが文化遺産を通じて、より盛んに自国の文化を提示し、国際交流するための一歩でしかないことを強調したことを記憶している。それ以前1973年から1983年にかけて、ユネスコによるボロブドゥール救済の国際キャンペーンは、成功を収めていた。そのことも私の推奨に説得力を与えていた。インドネシアが世界遺産条約に批准したのは1989年である。日本はその3年後の1992年に批准したのは、むしろ皮肉に思える。文化や外交はそんなものだと思う。最後に、巻頭に述べたこの研究の更なる展開を期待したい。

参考文献

本論の作成のために参照した事典と単行本と機関誌を列記した。

事典

“*Larousse du vingtieme siecle*” 6 volumes publie sous la direction de Paul Auge, Librairie Larousse, Paris, 1928

“*Encyclopaedia universalis*” CD-Rom, Encyclopaedia Universalis France, Paris, 1999

“*Encyclopaedia Britannica CD2000*”, Oxford University Press, London, 2000

「東南アジアの文化」《前田成文編「東南アジア学」第5巻》、弘文堂 1991
野口英雄「建築のトポロジー」第11章

千原大五郎「インドネシアの社寺建築史」日本放送出版協会 1975

千原大五郎「南の国の古寺巡礼ーアジア建築の歴史」NHKブックスNo. 496, 1986

野口英雄「中部ジャワの仏教遺跡」(「東南アジア研究」6巻4号、京都大学東南アジア研究センター) 1969

野口英雄「建築と空間象徴」(「東南アジア研究」22巻1号、京都大学東南アジア研究センター) 1984

Slamet Muljana, "Nagarakretagama dan tafsir sejarahnya (A Historic Interpretation of the Nagarakretagama)", Jakarta: Bhratara Kary Aksara, 1979

Slamet Muljana, "Pemugaran persada sejarah leluhur Majapahit (Reconstruction of the History of Mahapahit)", Jakarta: Idaya Press, 1983

"Sejarah daerah Jawa Barat (The History of West Java)", Jakarta: Proyek Penelitian dan Pencatatan Kebudayaan Daerah, Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya, Dept. Pendidikan dan Kebudayaan, 1977

"Sejarah daerah Jawa Tengah (The History of Central Java)", Jakarta: Proyek Penerbitan Buku Bacaan dan Sastra Indonesia dan Daerah, Dept. Pendidikan dan Kebudayaan, 1978

"Sejarah Kebudayaan Indonesia (Cultural History of Indonesia)", Yogyakarta: Yayasan Kanisium, 1973

"Soeroto Mataram I Kerajaan besat di Jawa Tengah 700 sampai 1050 (The Great Empire in Central Java from 700 to 1050)", "Seri Sejara Indonesia", Bandung: Songgabuwana, 1975

Coedes, G., "*Les etats hindouises d'Indochine et d'Indonesie*", 1948 (English translation "*The Indinanzed States of Southeast Asia*", edited by Walter, Vella, Honolulu: East West Centre Press, 1967

Pluvier, Jan M., "*Historical Atlas of South-Ease Asia*", Leiden: E.J.Brill, 1995

Cribb, Robert, "*Historical Dictionary of Indonesia*", "Asian Historical Dictionaries No.9", Metuchen N.J. and London: The Scarecrow Press, 1992

Dengel, Holk H., "*Annotated Bibliography of New Indonesian Literature on the History of Indonesia*", Stuttgart: Steiner Verlag Wiesbaden DMBH, 1987

Lonbard, Denys, "*Le carrefour Javanais — Essai d'histoire global*", 3

volumes, Paris: Editions de l' Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1990

Casparis, J.G. de, "*Selected Inscriptions from 7th to 9th century AD*", Bandung : Prasasti Indonesia, 1956

Casparis, J.G. de, "*Short Inscriptions from Tjandi Plaosan-Lor*", Jakarta: Berita Dinas Purbakala, 1958

Casparis, J.G. de, "*Inscripties uit de Cailendra-tijd-prasasti 2 dari zaman Cailendra*", Bandung : Prasasti Indonesia, 1950

Erp, Th. Van, "*Voorstellingen van vaartuigen op de reliefs van den Boroboedoer*", Hague: Nederlands Indie Ouden Nieuw 8, 1923

Krom, N.J., "*Hindoe-Javaansche Geschiedenis*", Hague: Archaeologische Beschrijving, 1931

Krom, N.J., "*Beschrijving van Baraboedoer*", Hague: Archaeologische Beschrijving, 1920

Krom, N.J., "*Inleiding tot de Hindoe-Javaansche Kunst*", 3 volumes, Hague: Archaeologische Beschrijving, 1920

Soekmono, R., "*Borobudur*", Paris: UNESCO, 1973

"*International Symposium on Chandi Borobudur*", Tokyo: Executive Committee and Kyodo News, 1981

Stutterheim, W.F., "*Tjandi Barabudur, Naam, vorm en beteekenis*", Hague: Weltevreden, 1929

Kempers, Bernet, "*Ancient Indonesian Art*", Amsterdam: Van der Peet, 1959